探究する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

愛知県立安城高等学校
（普通科全学年 総合的な探究の時間
ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）
※ＡＢＰは安城高校における
「総合的な探究の時間」の呼称
ANKO Bridge Project

ねらい

安城高校で学ぶ３年間で“社会とともに生きる自分”を目指す。

❶ 主体性・協働性を伸ばし、自ら学びに向かう態度を養う。
❷ 社会に貢献できる自己の在り方・生き方を考える。
❸ 他者との協働活動を通して、寛容の精神を涵養する。

学習者の状況

第１学年の総合的な探究の時間でＳＤＧｓの概要をクラス単位で探究的に学んでいく。

第２・３学年の同時間で、興味のあるＳＤＧｓのテーマを選択し、ゼミナール形式で深めていく。ゼミナールは地域の企業等がそれぞれアドバイザーとして参加。

成果指標

“社会とともに生きる自分”を目指すことができたか。

❶ 主体性・協働性を高められたか。
❷ 自己の在り方・生き方に気づけたか。
❸ 寛容の精神を涵養できたか。

■取組の内容（学校）

学校の工夫

学習者の反応

学習の効果＆主に育まれる力

１　ＳＤＧｓの 17 の目標の中から生徒自らテーマを設定

・第１学年でＳＤＧｓに関して得た知識を活かし、興味・関心を持って探究できるよう、生徒自身がテーマを選択。
・各テーマは、第２・３学年各 20 人の計 40 人からなり、クラス・学年の枠を超えた構成とすることで、生徒同士が学び合いにより、幅広い視点を持てるよう工夫。

共感・納得　見通しOK　見守り

・第３学年は前年度までの成果を深化させ、後輩を指導しながら関心を一層深められた。
・第２学年は身近な関心の中から具体的な行動案を第３学年とともに検討した。

・第１学年で学んだ全体像から、第２・３学年でさらに興味・関心のあるテーマを選択することで、主体的な学びにつなげることができた。

体感　理解　共働　探究　活用

２　あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとともにＳＤＧｓテーマで探究学習

・学んだ知識や集めた情報を活用し、具体的な行動に移すことができるように促す。
・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーをアドバイザーとし、体験学習等も取り入れながら、地域社会とのつながりができるよう工夫。
・パートナー企業と対面で検討・振り返りの場を設定し、企業と連携することで、学校と企業の信頼関係を構築。

見守り　本物体験　見通しOK

・学校の先生と企業担当者の視点がそれぞれ異なり、多角的に検討できるため、アイデアの幅が広がった。
・先輩と一緒にグループワークをすることで、先輩の取り組む姿から探究の仕方について直接参考にすることができた。

・パートナー企業との連携や体験学習により、学習の幅や深まりを生み出すことができた。
・クラス・学年の枠を超えたグループ編成で活動することで、生徒同士の学び合いにつなげることができた。

体感　理解　共働　探究　活用

３　３学年合同の成果発表会

・成果発表会に向けて、内容を分析することや、発表資料としてまとめることで、学びを深める。
・新たな課題や気づきが得られるよう、互いの発表を聞き合いグループごとの成果を共有することや、企業から直接コメントをもらうように工夫した発表会を開催。第１学年は、クラスで班別に制作したポスターを体育館の展示し、上級生や企業の方に観覧してもらい、助言をいただく。第２・３学年は、取り組んできたアクションプランについて各ゼミナールより報告し、参加企業からコメントをいただく。
・企業とのやり取りの中から生徒の社会性を育て、キャリア意識を高められるよう工夫。

ゆさぶり　共感・納得　成果実感

・展示を見た企業の方や先輩からの質問や感想を聞いて、他者に思いを伝えるにはさらなる工夫が必要だと感じた。（第１学年）
・一つの発表に対し複数の企業がコメントする中で、SDGs のすべてのテーマが根っこでつながっていることや、できることから少しずつ行動を起こすことの重要性に気づいた。（第２・３学年）

・上級生の取組を下級生が見ることで、次年度の学びに対し、後輩が見通しを持つことができた。
・一つのゼミ報告に対し、複数の企業から助言を受け、企業目線で社会のリアルを考察できた。

体感　理解　共働　探究　活用

■取組の内容（企業）	企業の工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
豊通物流（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　１ 貧困をなくそう 　　２ 飢餓をゼロに	・生徒の主体性を伸ばすために、新たな気づきを促すような学びの場をサポート。自社とつながりのある団体、担当者の個人的なつながりで、別の企業や大学関係者とゼミナールとを接続し、生徒の学びを膨らませた。 ・積極的に企業の方が来校され、生徒とのセッションを重ねたことで生徒の見方・考え方がより深められた。 ゆさぶり　本物体験　成果実感	・昆虫食について調べていく際に、実際にコオロギパウダーを製造している会社の方が来校されて、セッションをしていると探究が面白く感じた。 ・電話やメールでも、大学の先生とコンタクトを取れた。現地インタビューにも行けて勉強になった。 	・関心ある事柄を探究すると、様々な関連があることに気づき、課題が複雑に絡み合っていることに気づいた。 ・大学や会社が、高校生の学びに協力的であることに感動した。
ニチバン（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　13　気候変動に具体的な対策を	・生徒が主体的に考え、探究することができるよう、実物等を使って生徒の興味・関心を引き出し、具体的なアクションを考察できるようにした。 ・実際の製造工場と教室をオンラインで結んで、日常の製造工程において、工場が徹底している工夫改善の仕組みをリアルに体験することができた。 本物体験　驚き・感動　成果実感	・コロナ禍の当時は、実際に工場に足を運ぶことは難しかったが、工場とオンラインで結ぶことで、よりリアルに感じ取ることができた。 ・教科書では学べない社会の実際の状況を感じ取ることができ、自分には何ができるか考えてみた。 	・学校の外へ視点を向けることで、リアル体験を通して社会の実情をつかみ取ることができる。 ・ネット情報だけの理解に留まらず、社会の動きに一層関心を持てるようになった。

■愛知県立安城高等学校（普通科全学年 総合的な探究の時間 ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）

・総合的な探究の時間を“ANKO Bridge Project”（ＡＢＰ）として実施している。令和４年度からは、ＳＤＧｓを手掛かりに、生徒が自ら課題を設定して、仲間と協働し問題解決に向けて考えることを学び、社会貢献を目指す取組として実施している。

・ＡＢＰはＳＤＧｓ探究学習だけでなく、キャリア教育や道徳、情報モラルなども取り扱い、社会に貢献できる人材を目指して取り組んでいる。

・高校生のうちからキャリアに視点を置いて、自らの在り方・生き方を考えられるように学校教育活動全体で学びを進めており、あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとなっている地元企業等 12 社から協力を得て連携するＳＤＧｓ探究学習がその中核となっている。

・ＡＢＰは生徒の主体性や協働性を育て、地域貢献する気持ちを高めることをねらいとし、外部講師を招くことが学校と社会をつなぐチャネルとして機能するように企図している。

・「ただ話を聞いて終わり」とならないように、生徒同士が話し合う場面を確保したり、生徒が発表する時間を保証したりして、生徒の探究心や学び続ける姿勢が安城高校卒業後にも続くように期待している。

学習者の変容

【生徒のコメント】

・世の中で自分が将来どう生きていきたいかをＡＢＰの活動から考えることができた。（第３学年）

・ＡＢＰで企業の方と直接話す機会があるのは、世界への視野が広がって、どのような進路を選べばよいか考えるきっかけになった。（第２学年）

【先生のコメント】

・普段の授業では見られない生徒の表情を見ることができて、普段の授業の形も再考する機会になった。

【企業のコメント】

・2022（令和４）年度の第２学年が、2023（令和５）年度は第３学年として、グループ内をうまく取りまとめ、リーダーシップを発揮できるようになっていた。

・当初は受動的な様子であったが、回を重ねるごとに、学生側から課題解決に向けた提案があるなど、積極的に活動するようになった。

成果と課題

【成果】

・クラス・学年や教科の枠を超えてＳＤＧｓのテーマに取り組むことで、発展的な活動や課題への意識を高めることができた。

・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーと協働することで、社会との一員として、よりよい社会の実現に向けて主体的に行動することができた。

・時代の流れに敏感になり、学校内で見ている常識以上に世の中の変化が目まぐるしいことに生徒・教師が気づかされた。

【課題等】

・ＳＤＧｓや時代の変化に対応していくための学びとしては有効だが、校内で必要となる他の活動とのバランスを考えると、十分な時間を確保するのが難しい。

・総合的な探究の時間の指導を充実させるために、教員研修の機会が拡充されれば、子どもたちへの関わりや支援が一層充実すると思われる。